

〈共同研究〉 称名寺聖教『法事讚光明抄』について (二)

—所引の『阿弥陀経』註釈書から見る展望と卷二翻刻—

佐竹真城・赤松信映・西村慶哉・井上慶淳

Some Notes concerning the 『法事讚光明抄』 (二)

Contained in the Shomyoji Temple

Shinjo SATAKE, Shin'ei AKAMATSU,  
Keisai NISHIMURA, Keijun INOUE

岐阜聖徳学園大学

仏教文化研究所紀要第20号

2020年3月

〈共同研究〉 称名寺聖教

『法事讚光明抄』について (二)

— 所引の『阿弥陀経』註釈書から見る展望と卷二翻刻 —

佐竹真城・赤松信映・西村慶哉・井上慶淳

要旨

『法事讚光明抄』四卷は、神奈川県称名寺所蔵(神奈川県立金沢文庫管理)になる国宝称名寺聖教のなかの一書であり、善導(六一三—六八一)撰『法事讚』二巻を註釈したものである。本書の撰者は、法然(一一三三—一一二二)の門下の一人である覚明房長西(一一八四—一二六六)であり、本書が彼の思想を窺うことができる貴重な一書であるといふことは、すでに『宗学院論集』九一号(二〇一九年)に巻一の翻刻とともに概要を記して報告した。小論はその続編にあたるもので、特に『法事讚』巻下において全文引用される『阿弥陀経』本文を解釈する上で、長西が引用する諸師の『阿弥陀経』註釈書から見えてくる展望を纏め、あわせて巻二の翻刻を紹介することで、今後の研究の進展を願うものである。

はじめに

小論は、「〈共同研究〉称名寺聖教『法事讚光明抄』について(一) — 概要と卷一翻刻 —」と題して発表した論攷の続編であり、称名寺聖教『法事讚光明抄』巻二の翻刻を掲載するものである。したがって、概要ならびに巻一の翻刻は前稿を参照願いたい。

また、巻二の翻刻を紹介するにあたって、本書所引の『阿弥陀経』註

釈書から見る展望について言及しておきたい。

『法事讚疑芥』<sup>2</sup>所引の『阿弥陀経』註釈書から見る展望(佐竹)

『法事讚疑芥』は、巻二から巻四にかけて、『法事讚』巻下を註釈している。『法事讚』巻下といえは、『阿弥陀経』(以下、『小経』と略称)を全文引用していることが知られ、当然ながら『法事讚疑芥』巻二から巻四には『小経』の註釈が施される。したがって、撰者である長西の『小経』理解を窺うことができるという点で、大きな価値を有している。

さて、本書における『小経』註釈の特徴の一つとして、諸師の『小経』註釈書を多分に引用しながら註釈する点が挙げられる。引用される諸師の『小経』註釈書と引用回数、左表の如くである。

■(表) 『法事讚疑芥』所引『小経』註釈書と引用回数

撰者	典籍名	引用総数	(巻二)	(巻三)	(巻四)
僧肇	『阿弥陀経疏』	47	28	11	8
天台	『阿弥陀経義記』	17	7	7	3
慧浄	『阿弥陀経義述』	1	0	1	0
仁岳	『阿弥陀経新記』	6	1	4	1
慈蔵	『阿弥陀経記』	5	3	1	1
慈恩	『阿弥陀経疏』	29	11	13	5
慈恩	『阿弥陀経通贊疏』	14	4	6	4
慈恩	『阿弥陀経述贊』	4	1	2	1
靖邁	『称讚浄土経疏』	1	1	0	0
玄一	『阿弥陀経疏』	29	15	10	4
円測	『阿弥陀経疏』	30	19	7	4

円測	『阿弥陀経疏』	30	19	7	4
元暁	『阿弥陀経疏』	12	5	4	3
智円	『阿弥陀経疏』	39	16	16	7
智円	『阿弥陀経西資鈔』	5	2	2	1
元照	『阿弥陀経義疏』	38	14	13	11
戒度	『阿弥陀経疏聞持記』	4	0	2	2
用欽	『阿弥陀経超玄記』	5	1	3	1
希深	『阿弥陀経疏』	3	0	3	0
源信	『阿弥陀経略記』	24	0	11	13
永観	『阿弥陀経要記』	29	10	8	11

※本表の撰者については、基本的に『仏書解説大辞典』に依拠しているが、諸史料に基づいて誤りを指摘できる場合、今日伝えられている撰者を示した。

『小経』の異訳である求那跋陀羅訳『小阿弥陀経』・玄奘訳『称讃浄土経』の註釈書も含めると、一七師・二〇書から、実に三四二回もの引用が確認できる。また、なかには引用後に「●●同之」(●●||人師名)などのように、同義である場合に引用を省略するケースもあることから、実際はより多くの引用数となったかもしれないことが想像できる。そして、これらの引用典籍のなかでも、殊に(一)今日には散逸して伝わらない典籍の引用が確認できる点、(二)僧肇撰と伝えられる『阿弥陀経疏』(以下、『僧肇疏』と略称)が最も多く引用されている点、そして(三)宋代典籍を多く引用しているという三点は注目に値する。今回は、この三点のうち、特に(一)(二)について整理しておきたい。

#### (一)所引の『小経』註釈書における散逸文献について

『法事讃疑芥』に引用される『小経』註釈書については、前掲の表に纏めた如くであるが、なかでも表において網掛け表記した典籍は、今日には散逸して伝わらない逸書である。殊に、慈蔵や仁岳・希深など、中世の浄土教諸師も殆ど引用していない人師の典籍が見られることから、『法事讃疑芥』の撰者である長西が、広い視野をもって研鑽していた事実を窺うことができ、『浄土依憑経論章疏目錄』(以下、『長西録』と略称)を纏め上げたことも納得できる。実際、『長西録』には、それらの逸書が記載されているのである<sup>3)</sup>。

そして、これらの逸書のなかでも、玄一撰『阿弥陀経疏』・円測撰『阿弥陀経疏』(以下、『円測疏』と略称)・永観撰『阿弥陀経要記』(以下、『要記』と略称)については、相当回数の引用を確認できる上、今日まで知られていなかった文言も散見されることから、逸文研究へと展開させられる可能性がある。とりわけ『円測疏』は、『長西録』には「円測西明。法相。本」(『仏全』巻一、三四三頁下)とあり、『法事讃疑芥』にも「アミタ経疏西明。法相。本云沙門。円測。撰」(巻二・五丁右)とあることから、今日に伝存していない求那跋陀羅訳『小阿弥陀経』を註釈したものであることが知られるので、その註文はもちろん所釈の經典という観点からも貴重である。

また、『要記』については、筆者はすでに『法事讃疑芥』をはじめとして、他の古写本および刊本等から逸文を蒐集して発表したことがある<sup>5)</sup>。そしてその逸文から、これまで知られていなかった思想を窺うことができ、永観研究に新見地を提供することができた。この点に鑑みれば、『法事讃疑芥』だけで完遂することは難しいものの、『法事讃疑芥』を端緒として、たとえば同じ称名寺聖教のなかの空寂撰『法事讃要略記』二巻<sup>6)</sup>や、道教撰『法事讃見聞集』(推定)甲・乙<sup>7)</sup>をはじめとし

た、他の古写本や刊本等から逸文を蒐集して研究を行うことで、浄土教研究に新たな視座を設けられる可能性があると考えられる。

如上、『法事讚疑芥』所引の『小経』註釈書は、浄土教研究に重要な意味を持つものと考えられる。これらの逸文研究は今後の課題である。

## (二) 『僧肇疏』について

僧肇(三七四または三八四—四一四)は、鳩摩羅什の門下として知られ、『肇論』などの著作を残している人物であるが、『僧肇疏』については、『長西録』を初見とする。『僧肇疏』については、たとえば良忠撰『法事讚私記』に「肇云」として引用されることが知られるが、その内容は、慈恩『阿弥陀経疏』(以下、『慈恩疏』と略称)とほぼ同一であるなど、種々の問題を孕んでいる。そして、『慈恩疏』も、今日では非慈恩撰述書と考えられており、その問題はより複雑化している。こうした『僧肇疏』と『慈恩疏』の関係について、小沢勇慈氏は、『法事讚私記』に引用される『僧肇疏』と『慈恩疏』を比較研究し、両書の説示は概ね一致するが、別時意の説示に大きな相異のあることを指摘している<sup>9</sup>。

『僧肇疏』は長らく散逸していたが、愛知県真福寺大須文庫に伝わる『漢書食貨志第四』の紙背に、三七〇行にわたって書写されているものに、「僧肇」との撰号を有していることが指摘されている<sup>9</sup>。それを承けて、近年では曹勢仁氏が、真福寺蔵本の『僧肇疏』を用いて、小沢氏の『慈恩疏』ならびに『法事讚私記』と比較した研究を深化させ、『法事讚私記』に引用される『僧肇疏』と真福寺蔵本『僧肇疏』との説示がほぼ一致することを指摘している<sup>10</sup>。

これらの研究を踏まえた上で、『法事讚疑芥』における『僧肇疏』と『慈恩疏』の引用に注目すると、次のような特徴を看取できる。

肇云、問此経部類多少……其余二经如前已积可知<sup>11</sup>。慈恩与之全同也。

(卷二・一丁右—左)

肇云、今别十六人、其中阿難雖非羅漢、以德望深重故。亦衆所知識在此会<sup>12</sup>。

(卷二・一一丁右)

肇、薄俱羅此云善谷……真実少欲一銭亦不受<sup>13</sup>。慈恩积全同也。

(卷二・二〇丁右—左)

肇云、智度論云、积為能提為天桓因為主……上来引証分、亦云証信序<sup>14</sup>。

(卷二・二三丁右)

恩云、智度論問云、浄土中諸仏有無量神力……亦令无情樹木而演說法聞則□受<sup>15</sup>。肇与觀同之。

(卷三・一四丁左—一五丁右)

すなわち、『僧肇疏』を引用するにあたって『慈恩疏』も同文であれば、『僧肇疏』の引文の後に本文乃至註記にて『慈恩疏』も同文である旨が記されるのである(『慈恩疏』を引用して『僧肇疏』も同文である旨を記す場合もある)。このことから、『僧肇疏』と『慈恩疏』が同一の文を相当数有していたことが知られる。一方で、

肇、法花経云、此名黑曜。増一阿含云、迦留陀夷其身極黑、夜行乞食時天大闇而至他屋、有聞電光。彼家婦人懷孕、電光中見謂之黒鬼、怖而墮胎。乃謂之曰、汝何鬼耶。答。我瞿曇弟子、今来乞食。彼女惡罵。如來知時、即救比丘不遇中食、亦不得預乞食<sup>16</sup>。

……恩云、正法花云、此名黑曜。毘奈耶律云、名黑光<sup>17</sup>。

(卷二・一九丁左)

肇云、計雨花意為嚴、意為嚴飾。其花覆地厚四寸。随色次□分布而不雜乱、光沢香奕。足踏上行裁、下四寸举足還起。曼陀羅者、此云花言如意花。曼殊沙名柔奕<sup>18</sup>。……恩云、曼陀羅者、此云赤円花、亦言如意花。正法花名適意花大適意花。若曼殊沙名為柔奕花。即大品経中、帝釈而曼陀羅花供養般若波羅蜜。須菩提言、此